

自立した主権者 をめざして



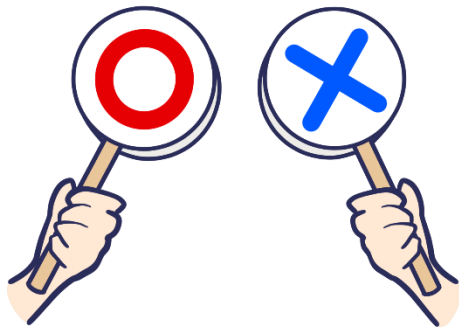
Vol.17 多数決は民主主義か

KEYPOINT

- 多数決民主主義と合意形成との関連性とは？
- 再び、あなたにとって凡庸の悪とは？

SUMMARY

私たちは普段「多数決」という言葉を簡単につかいます。多数決の結果自分が少数であった時、「なぜ多数の意見に従わなければならないのか？」と不満に思うことがあるかもしれません。多数決＝民主主義と言われることもありますが、多数が少数を支配することが民主主義といわれてしまうことには疑問を感じます。本来多数決とはどのような原理で行われるべきものなのでしょうか。



多数決が生み出す二項対立

初めて「多数決」を使った日のことを覚えているでしょうか。おそらく、小学校の学級会かな？という方が多いのではないかと思います。その時のテーマがクラスのルールを決めることであったり、役員を決めることだったり、何かしらその後のクラス運営にとって大事な決め事だった場合、多数決で決まったという事実が後々のクラスメイトとの関係にも影響してしまうという、「多数の支配」が行われたという経験も同時にされたかもしれません。多数＝正義、少数＝悪という二項対立の構図は、自分たちの意見が通った側が「今までに出された他の意見は無視してもよいのだ」という認可をもらったと錯覚してしまい、「みんなで決めたことだ」と多数決を免罪符のように振りかざすことから生まれてしまいます。しかし本来の多数決の原理は、例えばアメリカでは「政府を

組織し、公共の課題に関する決断を下すための手段であり、抑圧への道ではない」というもので、個人および少数派の権利の擁護というもう一つの原則と対の柱として民主主義政府の基盤そのものを支えるもの（出典：Bureau of International Information Programs “Principles of Democracy”）ですから、善悪や、勝ち負けの基準として使用するものではないのです。一人ひとりの意見を大事にしつつルールや結論を決めるために、まずはどのような意見があり、どのくらいの人があるのかを支持しているのかを知るための方法として、多数決はあるのかもしれませんが。

多数決が正しく機能するとき

多数決を正しく使うというとても分かりやすい例は、実はコンピューターの世界にみることができます。20世紀の科学者ジョン=フォン=ノイマンは現代のコンピューター原理の父のひとりとして知られていますが、彼が発表した「コンピューターが正しく作動する確率を高める方法」(von Neumann 1956)で、次のような理論を展開しています。ノイマンは、コンピューターの設計時に「低性能な電気回路から、高性能なコンピューターをつくる」ことを心がけていました。低性能な電気回路は、本来「X」と信号を送るべきところを、エラーを起こして「not X」と送ってしま

うことがあります。そうするとコンピューターは正しく作動しなくなってしまう。本来ならここで、より高性能な電気回路を開発しようとするのですが、それには多大なコストがかかってしまうのです。そこでノイマンは低性能な電気回路をいくつも並列させて使い、多数派の信号を採用するような設計をしました。例えば電気回路が3本あって、そのうち2本が「X」、残りの1本が「not X」の信号を発したとき、コンピューターが「X」を採用するという、いわば電気回路の多数決を行うという方法です。低性能であっても3本のうち2本の電気回路が同時にエラーを起こす確率は低いため、コンピューターが正しく作動する確率が多数決により大きく高まるという理論です。この理論は、フランスの数学者であり革命政治家コンドルセの多数決論を活用されたと言われています。

多数決を使う覚悟

本来多数決とはこのような、物事を前に進める際に正しい方向に向かう確率を「高める」という程度のものなのです。しかしコンピューターの回路のように統計学で処理ができるようなことは、私たち人間の社会での多数決では難しいかもしれません。目の前の現象として「X」と「not X」が存在するわけではありませんから、人々の意見として選択肢を絞っていく必要があ

るからです。その議論の際には同調圧力やフェイクの情報に惑わされない、自律した個人であることが前提として求められます。これには相当な覚悟と自覚が必要です。多数決の原理は単純ですが、多数決を正しく使うことは容易ではないなということが分かってきます。

多数決が民主主義なのではありません。私たちは、多数決に至るまでの過程で行われる議論で少数意見を受け入れ、尊重し、多数意見に少数意見を反映する調整をして結論と合意を出そうとするプロセスが民主主義であり、多数決によって決定に「参画」することもまた大切な自己決定であることを忘れてはならないのです。

〈機関紙「日本再生」No.512の内容〉

2022/01/01 発行

「コロナ後」にむけて、強靱な民主主義を鍛えよう ● 2-4 面/コラム/一灯照隅 ● 5-6 面インタビュー/信頼するに値する政治/小川淳也・衆院議員に聞く ● 6-8 面/インタビュー/総選挙・東京 10 区、栃木 4 区/鈴木庸介・衆院議員、藤岡隆雄・衆院議員 ● 8-9 面/インタビュー/野党共闘の深化/佐々木寛・市民連合@新潟に聞く ● 10-12 面/インタビュー/COP26/明日香壽川・東北大学教授に聞く

※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

- ・今まで多数決で決まっても納得できなかったことはありますか？
- ・話し合いで物事を決める時、どんなことが難しいと思いますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所: 埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所
担当: 吉田理子
ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。